

# 変動する世界と適応する私たちのために

高橋 康介

1年前に「来年には大学のキャンパスが閉鎖され、オンライン授業や対面授業なる言葉が飛び交い、大半の学生が自宅で大学教育を受けることになる」と話したとしたら、一体誰がこれを信じただろうか。現実とは、時に我々の想像を大きく超えて変動するものである。と同時に、我々人間は想像を超えるような変動にもしなやかに適応し、未だ不十分とはいえ新しい社会システムを構築していこうとする生き物である。

現在の心理学を取り巻く状況も大きな変動の真っ只中にある。心理臨床では、新たな国家資格として公認心理師がスタートし、臨床心理士との併存が続いている。しかしどのような資格でも、苦しんでいる人の助けになりたいという思いは変わらない。心理学研究科で学ぶ多種多様な学生からも、学生を育てる教員からも、その思いはひしひしと伝わってくる。両資格が今後どうなるのか予想はできないが、中京心理を含む国内の多くの大学、大学院では、志ある心理臨床人材の育成のため、新しい教育体制を整えている。

科学としての心理学研究に目を向ければ、20世紀後半から現在に至る影響力のある心理学的知見の数々が実は虚像だったかもしれないという再現可能性問題の危機に直面している。このクライシスに対して、人間を知り理解する学問としての心理学を取り戻すべく、オープンサイエンス、追試研究、事前登録研究といった透明で堅牢な科学システムの構築と実装が世界各地で進められている。

ところで変動に適応するために最も重要なもののひとつは、多様性だと私は思う。「多様性は、うんざりするほど大変だし、めんどくさいけど、無知を減らすからいいことなんだと母ちゃんは思う」とは、イギリス在住の保育士でもあるブレイディみかこ氏の『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』からの一節である。中京大学心理学部、心理学研究科では、昨年から今年にかけてダイバーシティ・ポリシーを作成し公開している。このポリシーではさまざまな個人に対する差別と不利益の解消が謳われているが、きっとその先で、多様性は無知を減らし、想像することを促し、新たな見方を獲得させることを通して、個人として組織としてのしなやかな適応力を培い維持することに繋がるのではないだろうか。

心理学部、心理学研究科は誕生からおよそ20年を迎える。人でいえば青年期が終わり、いよいよ社会を担っていこうかという時期にあたる。これまでの伝統を基盤に、しかし伝統に固執することなく、多様性を当然のものとし、常に外なる世界を眼差す組織でありたいと思う。そしてこの変動する世界のなかでしなやかに適応できる人材を輩出していくこと、何より心理学部、心理学研究科自体が変動する世界のなかでしなやかに適応していくこと、そのような私たちであるために全力を尽くしたいと切に願う。

末筆ながら関係各位の日頃よりのご支援に深く感謝するとともに、今後も変わらぬ叱咤激励をお願い申し上げます。

(中京大学心理学研究科長)